

平成24年度研究開発実施報告書(要約)

1 研究開発課題

世界基準の確かな学力を育成する小中高一貫した系統性ある教育課程の創造
～読解力を基盤とした「リテラシー」の獲得～

2 研究の概要

国際社会で生きていくための「リテラシー」獲得を目指して、「読解力」を基盤とした思考力・判断力・表現力を育成するため、小中高一貫教育を基盤に系統性ある教育課程を作り上げる。具体的には、

- ① 小中高の円滑な移行を図るため、発達の段階に応じて12年間を次のように分け、指導内容の重点化や工夫を図る。

KEY STAGE 1 (小1・2年)【身近な体験を通して学び、ことばに親しむ導入期】

KEY STAGE 2 (小3・4年)【表現方法や気づきの基礎を作る育成期】

KEY STAGE 3 (小5～中2年)【学ぶ方法や探究的な態度を育成する充実期】

KEY STAGE 4 (中3～高3年)【論理的な思考力・表現力や課題解決能力を育成する発展期】

上記の KEY STAGE1・2では「ことばの不思議科」、KEY STAGE 3では「不思議探究科」、KEY STAGE 4では「未来探究科」を新設し、「つきたい力」を獲得するための教育課程を実践する。

- ② 「読解力」を基盤とし、論理的な思考力や判断力、表現力の向上を図るため、複数の教科で育成した活用力をさらに高めるための方法論と評価方法の研究を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究の目的

安心院・院内地域では平成12年度から文部省の研究開発学校指定を受け、連携型中高一貫教育(安心院高校及び安心院地域の3中学校と院内中学校)を導入、「中高の相互乗り入れ授業(BS数学・BS英語)」「安心院・院内学」「チャレンジテスト」などを中心に様々な教育活動の実践を行ってきた。これらを通して連携校間の信頼関係を構築し、地域からの中高一貫教育に対する理解と協力を得てきた。連携中学校から8割を超える入学率からもそのことが伺える。また、高校において生徒同士が親密な間柄を作りやすく、共に学び合う学習集団の成立も早く、何事にも素直に取り組むといった受容的な学習態度が生まれてきた。しかし、次のような課題も顕著化してきた。

①自ら学ぶ意欲の減退

与えられたテーマには積極的に取り組むものの、自主的に学習することには課題があり、学習姿勢が受け身の児童生徒が多い。そのため、探究型の学習における意欲が継続しにくく、家庭で自主的に学習する習慣も十分に定着しきれていない。

②言語能力の低下

核家族化や少子高齢化が進む中、人間関係が希薄化しコミュニケーション能力が低下してい

る。その結果、立場や目的、相手との人間関係に応じた表現の仕方が十分身についていない児童生徒が増加している。

③ PISA型読解力の不足

テキストから単に情報を調べることはできても、身の回りの社会現象や自然現象について、目的に応じて必要な情報を的確に取り出すことが十分とはいえない。また、各教科で習得した知識や技能、経験などを総合的に活用し、客観的に思考・判断したことをもとに、自らの考えを適切に表現することが苦手な傾向にある。

このような姿はすでに小学校段階から見られている。特に「言語能力」や「PISA型読解力」の獲得については小学校段階の早期から取り組む必要があり、従来の中高一貫教育から小中高一貫教育へと連携の取り組みを深化していくことが重要であると考え。そこで、小学校から高等学校までの12年間を見通した教育実践を行い、前述の①～③の課題を克服し、国際社会で生きていくための「リテラシー」の獲得を目指していく。また、研究を進める際、具体的な言語活動を取り入れながら系統的な教育課程の編成を行い、児童生徒の発達の段階に応じて探究する力につながる思考力・判断力・表現力の向上を図るために本研究開発課題を設定した。

(2) 研究仮説

- ① 小中高12年間を見通し、発達の段階に応じて4つのKEY STAGE制をとり、「ことばの不思議科」、「不思議探究科」、「未来探究科」を新設し、導入・育成期（小1～小4）、充実期（小5～中2）、発展期（中3～高3）で区分した系統性ある教育課程の編成と、体系的・系統的な学習指導を行うことで、読解力を基盤とした「リテラシー」の獲得ができる。また、基盤としての「読解力」の確立の上に、複数の教科を横断した新教科の題材開発を行い、その活用を図る学習活動により、思考力・判断力・表現力の育成と向上ができる。
- ② 新教科の実施により目指した児童生徒像は以下の通りである。

- (1) 課題に対して「追究しようとする意欲・態度」をもった児童生徒
- (2) 視点を明確にし「違いに気づく」児童生徒
- (3) 「他者との関わり」を大切にしている児童生徒
- (4) 豊かに「表現する」児童生徒

【**追究しようとする意欲・態度**】とは、社会的・自然的事象などについて関心を持ち、そこから生まれた疑問を、他者と関わりながら粘り強く、意欲的に追究しようとする態度。【**違いに気づく力**】とは、思考力向上のために、直面している現象と既存の経験や知識とを比較して違いを見いだしたり、意味づけたり、関係づけたりする力。【**他者と関わる力**】とは、他者との関わりから、他者のよい点を見つけて、まねて、工夫して自分のものにしていく学びの力。【**表現する力**】とは、対象に働きかけて得た情報を熟考し、自らの考えや意見を目的や意図、場面に応じて的確に整理し他に示す力。本研究では、児童生徒にこれらのつけたい力の定着を目標に進めている。

(3) 教育課程の特例

① 新教科「ことばの不思議科」の新設

小学校第1学年から小学校第4学年まで（KEY STAGE 1・2）、週1時間、年間35時間（第1学年は年間34時間）を設定する。各教科や総合的な学習の時間から時数を充てる。

② 新教科「不思議探究科」の新設

小学校第5学年から中学校第2学年まで（KEY STAGE 3）、週1時間、年間35時間を設定

する。各教科や総合的な学習の時間から時数を充てる。

③ 新教科「未来探究科」の新設

中学校第3学年から高等学校第3年まで（KEY STAGE 4）、週1時間、年間35時間を設定する。各教科や総合的な学習の時間から時数を充てる。

④「BSタイム英語」「BSタイム数学」の設置

中学校第3学年では選択教科、数学、英語等の時数を充てる。

高等学校第1学年では英語・数学からそれぞれ1時間を充てる。

週1時間、年間35時間を設定する。

【KEY STAGE の設定理由】

本研究では、12年間を児童生徒の発達の段階に応じて4段階のKEY STAGEに分けた。

小学校第4学年と第5学年では、複数の情報の整理や問題発見、根拠を立てる道筋等におけるギャップ、具体的な物の見方から抽象的な見方へ変化する部分や、客観的な自己評価の芽生えの時期であることを考慮しKEY STAGEを分けている。

中学校第2学年と第3学年では、物事や体験を自分の中で客観的に捉え直して再現する事が出来たり、自分がどういう方法で問題解決を行ったのかを理解したりする力が高まり、さらに「自己概念」ができる年齢であること等を意識し区切りとした。

また、表現する力の育成について、従来の小中高の枠組みでは、校種の異なりから各学年での指導方法や、つきたい力等に関して指導者の共通理解が図りにくかった。そのため、つきたい力の系統性を指定し、前のKEY STAGEでつけた力がすべての基礎・基本となり、後のKEY STAGEで活用することができるように構成している。さらに、KEY STAGEを分けることで、小中と中高の教員がつきたい力の系統性を意識して、新教科のカリキュラムを作成できることでも有効である。

4 「研究の内容」について

（1）教育課程の内容

①「ことばの不思議科」（KEY STAGE 1・2）の目標と具体的研究実践

身近な体験を通してことばを収集し、興味・関心・意欲を喚起しながら、テキストに書かれた情報と自分が持つ知識や実体験とを結びつけて、自分の思いや考えをまとめたり、比較の視点や判断の理由づけなどを考えたりする態度とスキルを養う。

KEY STAGE 1・2では、身近な体験や身の回りのものを題材に、スキル学習や追究学習を行ってきた。スキル学習では、違いに気づく力をつけるために、発達段階に応じて並べ替えやランキングを使って整理・分析の方法を学んできた。また表現力をつけるためのスキルでは、小学校第2学年で、伝えたいことを見出しやキャッチコピーにして伝えようなどの活動を行った。追究題材では、特に課題に対して追究する場合、KEY STAGE 2では、特に聞き取り調査や現地の見学などに直接出向き、実感を伴う追究を心がけ、児童が意欲的に活動に取り組むようにした。小学校第3学年では、地域のイチイガシの木について調べ、調べたことを伝えたい順にランキングすることで、地域の宝を見直す活動を行った。小学校4学年では、教室のベランダに巣をかけたツバメから、「ツバメはどんなところに巣を作るのだろう。」を課題にして、地域のツバメの巣のある家庭を調査しながら課題を追究していった。

また、課題追究してきたことを、ポスターやチラシの「工夫や秘密」を探っていくことで効果的に表現することを学んできた。

②「不思議探究科」(KEY STAGE 3) の目標と具体的研究実践

情報を、収集・比較・分類・整理・検証分析などを行い、多面的なものの見方や捉え方を身につけさせ、自らの考えを主体的に判断・表現し、よりよく問題解決しようとする態度とスキルを養う。

小学校第5・6学年の「不思議探究科」では、「地域」のテーマで「新聞の工夫を探ろう」や「宇佐からあげのCMをつくろう」などを題材として、違いに気づく力や他者と関わる力をつけてきた。中学校第1・2学年では「社会」をテーマに「河川調査」や「空き家の有効利用」などを題材として、自分の住む地域から社会に視点を広げ、様々なデータの読み取り方や活用の仕方、調べたことや考えたことをプレゼンテーションする学習を行った。また、表現する力を養うため、小学校第5学年から段階的にディベートやパネルディスカッションを行った。これらの活動を通して、地域や社会の事象における変化や違いの視点に気づき、それらに関係づけたり推理したりし、自分なりの課題を発見する力、読み取った複数の情報を根拠に資料を活用し自分の考えを他者に分かり易いように説明する力をつけてきた。

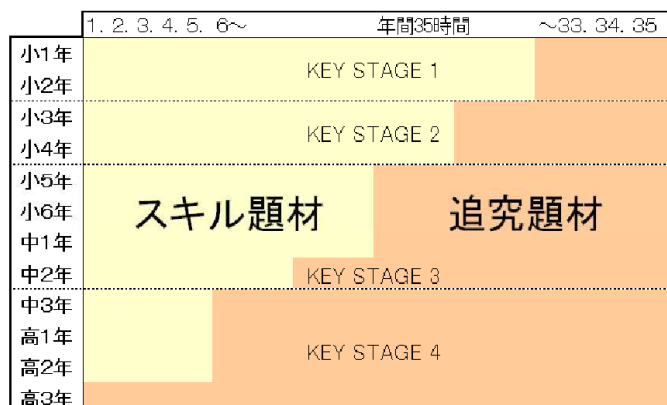
③「未来探究科」(KEY STAGE 4) の目標と具体的研究実践

課題発見をもとに、課題解決のための計画を立てたり、仮説から結論にいたるまで、根拠のある推論を立てたり、建設的に評価したりする学習を通して、論理的な思考力・判断力・表現力や課題解決能力を育成する。

中学校第3学年の未来探究科では、「よのなか探究」のテーマの元、これまで「難民問題」や「エネルギー問題」などを題材にして探究活動を行い、表現する力、他者とかわる力を身につけてきた。高等学校第1学年では、地元地域の課題を調査し、自分たちの考えを地域に提言する「安心院・院内学」で探究活動を行った。また、身近な内容を元にディベート活動や、2年生で行う個人研究に結びつける学習活動を行った。高等学校第2学年では、中学校第3学年から身に付けてきた探究活動の経験を生かし、生徒一人ひとりが課題を設定し、その課題解決のために各自で活動計画を立て調査、研究の後に分かったことを多くの人に発表する活動を行った。高等学校第3学年では、社会の出来事と自らの生き方なり方を考えるために新聞スクラップを元にした討論会や自分の将来像の形にするライフプランの作成などを行った。

④ スキル題材と追究題材の設定

右図は、12年間の新教科の教育課程を示しており、横軸は週1時間年間35時間の時間座標を示している。新教科の題材をスキル題材と追究題材に分け教育課程を作っている。スキル題材とは、情報の集め方や分類の仕方、討論の仕方など問題解決に必要なスキルを習得することを目的にしたものであり、追究題材とは、スキル題材で身につけたスキルをトレーニングすることを目的とし、課題解決をしていく場面でスキルをどのように使っていくのかを学



スキル・追究題材の年間計画

習する。そのために、児童生徒の発達段階を考え題材選定をするとともに、低学年ではスキル題材の割合を多くし、高学年になるに従って追究題材の割合を増やしていくようにし、積み重ねたスキルを活用していく場面を多くするように教育課程を組んだ。具体的な授業内容は、各学年でつけたい力を考え、整理した次のような表をもとに、つけたい力が効果的に身につくように題材選定を行った。

【資料1】

教科	KEY STAGE	対応学年	テーマ	つけたい力			
				追究しようとする意欲・態度	違いに気づく力	他者と関わる力	表現する力
ことばの不思議科	KEY STAGE 1	小1	わたしと みのまわり	自ら進んで驚いたことや不思議に思ったことを見つけようとする	比べる力	話を聞く力	自分の気持ちや考えを話す力
		小2			順序つける力	意見の共通点を見つける力	体験したことや経験したことを、ことば・動作・絵などで伝える力
	KEY STAGE 2	小3	生活	課題を自らの問題として見つけようとする	分類する力	主張を理解する力 (相手の言うことを理解する力)	テキストから読み取ったことを話す力
		小4			情報を整理する力	意見の相違点を見つける力 自分の立場で評価する力	たとえば理由をつけて発表する力
不思議探究科	KEY STAGE 3	小5	地域	見つけた課題に対して、解決の方法を予測しようとする	関係づける力	相手の意見を客観的に評価する力	複数の資料から必要なものを選ぶ力
		小6			理由づけ・定義づけをする力	見通しを持つ力 自分の考えを客観的に評価する力	内容を整理工夫して説明する力
	社会	中1	活動の計画を立て、他者と協力して課題を解決しようとする	推理する力(科学的・数学的に分析する力)	意図をくみ取る力 計画を立てる力	資料を活用しながら説明や報告をする力	
		中2		社会に目を向け課題発見する力 多面的・実的に分析する力	討論する力	根拠をはっきりさせて説明する力 相手を説得する力	
未来探究科	KEY STAGE 4	中3	よのなか探究	地域や社会の課題解決に向け主体的に関わろうとする	問題解決に必要なものは何かを考える力	相手の意見を取り入れて自分の意見を再構築する力	立場をはっきりさせて説明する力
		高1	郷土探究		発見した課題における問題解決の情報を集める力	共同して考えを発展させる力	自分の考えを深めて論述する力
		高2	課題探究	地域や社会の発展に貢献し、積極的に自分の生き方につなげようとする	絶えず課題や目標を設定する力	責任をもって意志決定する力	仮説・検証・結論を述べる力
		高3	社会探究		社会の課題を発見し、多角的に構造化する力	当事者意識をもって社会と自分をつなぐ力	未来や夢を提言できる力

4つの観点において12年間の各学年でつけたい力を整理した表

(2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ◇新教科「ことばの不思議科」「不思議探究科」「未来探究科」のカリキュラム編成と教材開発の研究・実践 ◇新教科の評価規準と学年到達目標の作成 ◇評価方法の研究・開発 ◇研究開発の目指す方向性についての小中高教員研修 ◇公開研究会の開催
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ◇新教科「ことばの不思議科」「不思議探究科」「未来探究科」の評価規準と学年到達目標（つけたい力）の修正と系統性の確立 ◇新教科と既存教科と総合的な学習との能力面での関連性についての研究 ◇評価規準と年間カリキュラムの修正と実践の継続 ◇評価方法の研究・実践 ◇研究開発の目指す方向性の修正と確認についての小中高教員研修 ◇研究開発の中間発表会の開催
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ◇新教科「ことばの不思議科」「不思議探究科」「未来探究科」の実施による効果と課題の整理 ◇評価規準と年間カリキュラムの実践継続 ◇新教科実践に伴う情報交換の小中高教員研修 ◇研究開発最終年の研究発表会の開催

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の実態調査アンケート（5月）：小3～中3を対象に実施 ○読解力測定検査（5月）：小4～中3を対象に実施（7小学校2中学） ○教職員による研究についてのアンケート（8月・2月）連携校職員 ○運営指導委員会（7月・10月・2月） ○年度末基礎学力検査（1月）：小1～小6（7小学校）
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の実態調査アンケート（5月）：小3～高3を対象に実施 ○読解力測定検査（5月）：小4～中3を対象に実施（7小学校2中学） ○教職員による研究についてのアンケート（8月・2月）連携校職員 ○研究発表会授業アンケート（11月）：研究授業参観教員 ○保護者アンケート（12月）：連携10校の児童生徒の保護者 ○運営指導委員会（6月・11月・2月） ○年度末基礎学力検査（1月）：小1～小6（7小学校）
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の実態調査アンケート（5月）：小3～高3を対象に実施 ○読解力測定検査（5月）：小4～中3を対象に実施（7小学校2中学） ○教職員による研究についてのアンケート（8月・10月）連携校職員 ○研究発表会授業アンケート（11月）：研究授業参観教員 ○保護者アンケート（12月）：連携10校の児童生徒の保護者 ○運営指導委員会（6月・11月） ○年度末基礎学力検査（1月）

A 測定

① PISA型読解力の調査による評価

「全国学力・学習状況調査」のB問題の過去問を利用し、または参考に作問した問題を小学校第4学年から中学校第3学年までの児童生徒を対象に毎年5月に読解力検査を行い、PISA型読解力がどれだけついているかを調査した。

② 学力テストによる評価

既存の学力テスト（全国学力・学習状況調査、大分県基礎・基本の定着状況調査、宇佐市ステップテスト）等にどのような影響を与えているかを評価した。また、現在、中学校においては5教科のチャレンジテストを年3回実施している。これは小中高の教員が進度に合わせて作成し、結果を分析して、授業改善することを目的としている。連携7小学校でも同様に、授業の質の向上を目的としたテスト（DRT検査）を実施し、新教科実施による影響を調べた。

B 見取り

① 個人カルテによる評価

児童生徒一人ひとりに対して『連携型小中高一貫教育「ことばの不思議科」「不思議探究科」「未来探究科」個人カルテ』を作成する。これは授業や活動への集中力、対話への参加、興味・関心の持ち方並びに持続力、個別の探究テーマなどを主に学級担任が見取り、記入するものである。小1年から高3年まで継続的に記録して、変化の様子や研究の深まりを比較した。

② ポートフォリオによる評価

新教科において、児童の学習意欲や探究する力、文章や作品を用いて表現する力などを評価するためには、ペーパーテストでは評価しにくいこともあり、ポートフォリオ評価を取り入れた。また、学習の履歴をファイルに残し、ワークシートや作品などを用いながら、児童が自己評価と相互評価を通して、評価規準の4つの観点である「追究しようとする意欲・態度」「違いに気づく力」「他者と関わる力」「表現する力」を振り返る。

③ アンケートによる評価

発達の段階に応じて「学び」についてのアンケートを行い、児童生徒との個人面談における基礎資料とする。また、児童生徒の興味関心のポイントを検証し、授業内容の改善に役立てるとともに、児童生徒の変容を確認した。

C 保護者・地域による評価

安心院・院内地域に広報誌（「小中高一貫便り」）を配布し、理解と協力を求める活動を行う。「地域の子どもは地域で育てる」という気運を高め、あいさつ、時間を守る、生活のリズム等に関する申し合わせを各校のPTAと協力して進める。また、小中高合同の地区懇談会（地域の小学生、中学生、高校生の保護者と学校関係者の懇談会）を実施し、保護者・地域からの意見要望を聞く。新教科実施に対する保護者アンケートの実施（平成23年12月）

小中高連携した学習の記録		校長氏名	印
「ことばの不思議科」 「不思議探究科」		担任氏名	印
() 小学校 () 学年 名前 ()			

学習の記録

月日	学習内容①	学習してわかったこと、思ったこと	学習意欲がわかって
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊

月日	学習内容②	学習してわかったこと、思ったこと	学習意欲がわかって
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊
			😊

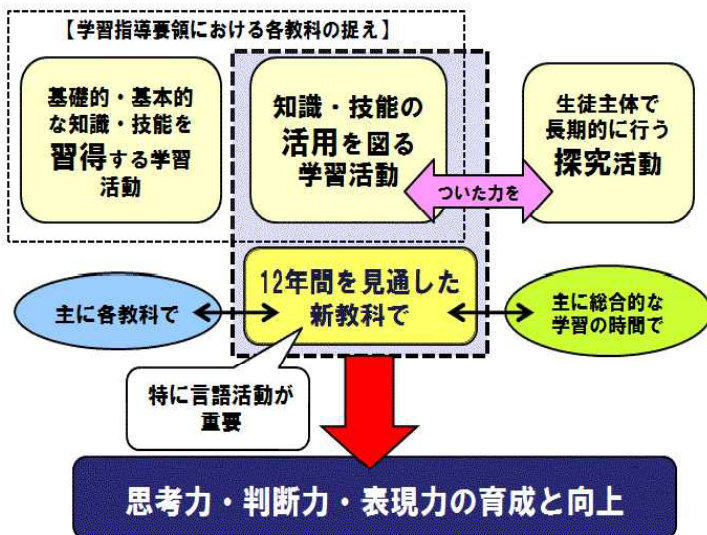
振り返り	
------	--

〔小学校高学年用のポートフォリオ〕↑

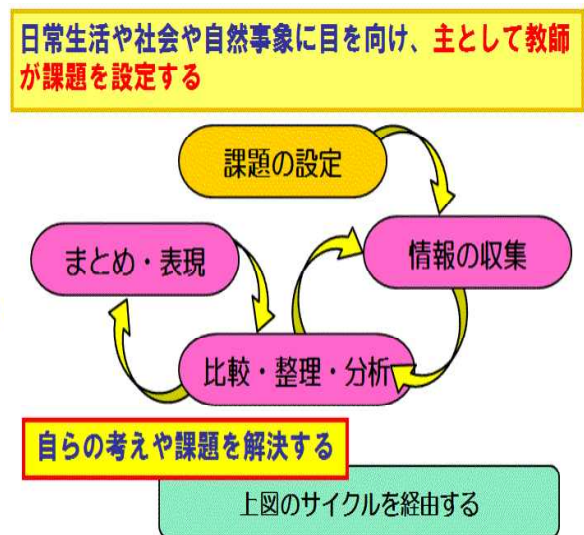
【資料2】 新教科の評価規準

新教科 評価規準				
観点	追究しようとする意欲・態度	違いに気づく力	他者と関わる力	表現する力
KEY STAGE 1	驚いたことや不思議に思ったことを積極的に見つけようとする。	身の周りのものを通して、五感を基に色・形・大きさなどを比べたり、順序づけたりする。	相手の考えをしっかりと聞いて、受け止めたり、共通点を見つけたりする。	自分の気持ちや考え、体験および経験したことを、ことば・動作・絵などで伝える。
KEY STAGE 2	発見したことを比較・分類しながら、課題や気づき・発見を自らの問題としてと捉え、それを他者へ伝えようとする。	体験を通して身近な物事を分類したり、その情報を整理したりする。	相手の考えがわかるとともに、自分の考えと他者との考えの相違点に気づき、自分の立場で評価する。	テキストから読み取ったことを自分の知識や経験と結びつけて話したり、自分の考えをたとえや理由をつけて発表したりする。
KEY STAGE 3	課題に対して予想を立て、解決の方法や活動の計画を立て、他者と協力して積極的に解決しようとする。	地域や社会の事象における変化や違いの視点に気づき、それらと関係づけたり推理したりし、自分なりの課題を発見する。	他者の意見や主張の意図をくみ取り、自他の意見や考えを客観的に評価したり、相違点を明確にしながらか議論したりし、考えを広げ深める。	自分の考えを、読み取った複数の情報を根拠に資料を活用し、相手に分かり易いように説明する。
KEY STAGE 4	人々や社会、自然に興味・関心を持ち、地域や社会の課題解決や発展に向け主体的に参画・貢献し、自分の生き方につなげようとする。	広い社会に目を向け、社会の疑問に立ち返り、課題を発見し、複雑な問題状況における事実や考えを多角的に構造化し、自分の考えを形成する。	異なる意見や他者の考えを受け入れ、共同して考えを発展させ、自己を振り返り自分の考えを再構築するとともに、地域社会に参画し貢献しようとする。	複数の材料を基に因果関係を推論したり、帰納的・演繹的に考察したりし、自分の立場を明らかにし、論理の展開を工夫しながら説得力のあるプレゼンテーションをする。

【資料3】 新教科の位置づけ



【資料4】 授業展開イメージ



新教科では、既存教科で「習得」した知識・技能を、総合的な学習の時間をはじめとする「探究活動」で「活用」するための学習活動を系統立てて行うことを目的としている（上図，資料3）。小学校の低学年では、言語活動を重要視した活動を行う。また、12年間の児童生徒の発達段階に応じた課題を「つけたい力」として整理した。新教科の授業展開の特徴は、主として教員側から児童生徒に「つけたい力」を意識した課題設定を行い「情報の収集」「比較・整理・分析」「まとめ・表現」の活動を繰り返しながら、各教科の目標を達成させていくことにある。（上図，資料4）

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

本研究実施による効果を考えるにあたり、以下の内容に関して整理し、考察を行った。

a：連携型小中高一貫教育体制を柱とした新教科の教育課程の創造

b：「読解力」確立を意識した授業実践による思考力・判断力・表現力の育成・向上

aについては、研究開始以前から連携型中高一貫教育の実績もあり、新たに7小学校を含めての連携型小中高一貫教育体制は3年間で確立できたといえる。ただ、当初からスムーズな体制で研究が進められた訳ではなく、地域、保護者の教育に対する関心の高さに支えられ実現できたといえる。

bについては、目指す生徒像（『課題に対して「追究しようとする意欲・態度」を持つ』、『視点を明確にし「違いに気づく』』、『「他者との関わり」を大切にする』、『豊かに「表現する』』）の4観点から児童生徒の変容を見取った内容を以下にまとめる。

① 児童・生徒への効果

(ア) 児童生徒の変容見取りのための教職員対象アンケート（24年の10月に実施）

平成22年度～平成24年度までの3年間で児童生徒の変容について連携小中高10校の教職員にアンケートを実施し、「研究開発前の児童生徒の実態」と「新教科実施後の児童生徒の変化」を聞いた。以下はその回答の一部。研究開始前の児童生徒の課題点を教員は4観点の内の「表現する」部分にあるとして捉え、回答の約半数がアのような「表現する力」に関するものであった。

ア：思いや考えを筋道を立てて相手に伝えることが不得手。説明することを面倒がる。
イ：話し合いやグループでの活動では自分の意見や考えがうまく言えず消極的であった。
ウ：辞書や本を使って調べる姿があまり見られず、必要な情報を見つけ出せない。
エ：授業中の発言（回答、考え）が根拠のない「なんとなく」といったものであった。
オ：文章でまとめることが苦手であり、自分の意見を書いて表現できない。

そして、「新教科実施後の児童生徒の変化」についての質問には、以下のカやキのように「違いに気づく力」、「他者と関わる力」の定着を評価する意見が「表現する力」よりも多く挙げられた。

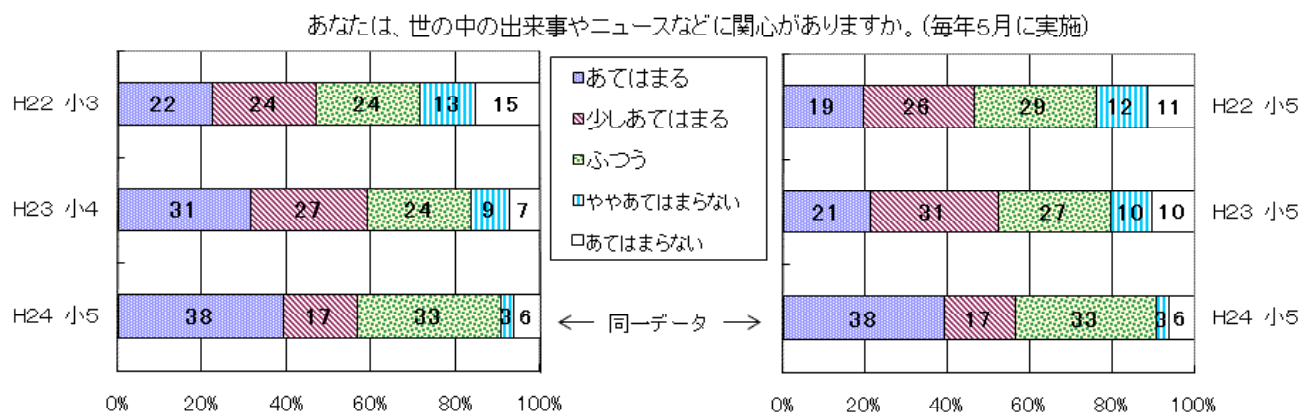
カ：経験から漠然と答えるのではなく、「ここにこう書いてあるから・・・」というような答え方ができるように変わった。テキストをよく見るようになった。
キ：グループ活動がスムーズに行えるようになり、以前は自分の考えを批評されるとやる気を失っていた生徒が、批評を「自分へのよりよいアドバイス」と捉えることができるようになった。
ク：付箋を使うことに慣れ、整理したり分類したりするスキルに慣れてきた。
ケ：既存教科の授業においても「一番重要なのは・・・」という視点で考えはじめた。

以上のことから、本実践でのスキル題材の学習を通じての「違いに気づく力」と「他者と関わる力」については、期待したとおりの効果があったと考える。特にKEY STAGE 1～3までの段階でのスキル習得は、その後の探究活動や表現活動に効果的であることが多くの教員の意見から見て取れる。また、「表現する力」に関しても児童生徒の発表する姿勢や意欲の面において効果的な定着が見て取れるが、「表現する力」の定着を意図したスキル題材での定着効果のみで向上したのではなく、自分が調べようとするものへの課題意識の向上や、調べたり、まとめたりする活動を通してのスキル習得による探究技術の向上が、発表への意欲・態度を向上させることによって「表現

する力」の向上に繋がっている場合が多いと判断できる。一方、KEY STAGE 4での自ら課題を設定し、解決のための計画立てや意欲の継続に関しては、成果はあまり見られていないと考える。しかし現中学第1学年（研究開始時小5）には、グループ活動での活発さや発表時の表現力の豊かさが見られ、KEY STAGE 3における本研究の実践の効果が顕著に見られるとともに、KEY STAGE 1・2でのことばに親しむ言語活動や「比べる・順序つける力」や「分類する・意見の相違点を見つける力」など、「つけたい力」の習得はその後の探究活動、表現活動の基盤となるものとして重要だと考えることができる。本研究は小中高一貫教育を基盤として12年間の児童生徒の変容をみることにあり、3年間では十分な変容を見て取れない部分も多く、今後も継続して見ていきたい。

（イ）児童生徒の実態調査アンケート（22年～24年 各5月実施）

下図は連携10校の児童生徒（小3～高3）を対象に5月に実態調査アンケートを実施した結果の一部である。左は同一児童学年の平成22年（小3）から平成24年（小5）までの変化の推移を示し、右は各年度の第5学年の経年比較を示したグラフである。「あてはまる」と回答した割合が増加し、社会の出来事に関して関心を持つ生徒が増加したことを示している。このような結果は、「文章を書くのが好きですか。」「文章で相手に自分の考えを伝えるのが好きですか。」「毎日の学校の授業が楽しいですか。」といった質問においてもKEY STAGE 1～3のほとんどの学年において、同様な変化が見られた。特に小4～中1の学年では、良好な成果が見られ、本研究の新教科の影響だけによるものとは限定できないものの、「つけたい力」の習得が授業に臨む姿勢などに効果を示していると考えられる。しかし、中1から中2へ、高1から高2へと校種が変わった後での変化は数値が下がる傾向にあり、校種間ギャップを減らすことに対する課題は残っている。



② 教員・地域・保護者への効果

- ・つけたい力を意識し、児童生徒の発達段階や理解度に応じた指導の工夫するようになった。
- ・新教科開発を行うことで、これまで経験のなかった指導方法や評価の仕方について研修し、積極的に題材選びや実践を試みるようになった。
- ・連携型小中高一貫教育を基盤とした他校種間の教職員交流によって、目の前の児童生徒のより具体的な将来像を描いた上での指導ができるようになった。更に、小中高教職員と保護者を交えた地域懇談会は今年で3年目を迎え、今年度は7小学校の各校区で実施することができた。

（2）実施上の問題点と今後の課題

児童生徒の変容を見取るには3年間では期間が短い、習得したスキルを既存教科などで生かすことはできるようになったと考えることができる。しかし、そのことを自分の実生活の中で活用できていない面があり、特に、自分の将来の目標を持たずに生活を送る児童生徒が多い。つまりスキルは習得したが自分の目標実現にそれを活かすことができない状況にあるといえる。今後は、「課題解決力」や「目標実現力」を児童生徒に如何に育てていくかが課題になると考える。